



踊り論



雲地草夫

踊らされる人々

「踊る阿呆に見る阿呆。同じ阿呆なら踊らにゃ損損。」阿波踊りの掛け声より。

これは踊りの本質を突いた実に鋭い言葉である。私の記憶に残っているものの中で、過去日本人がもっとも踊らされたものといったら、バブル景気であろう。もっと規模の小さいものの中では、インターネット、ワールドカップ、ウルトラマン、新幹線などが挙げられるだろう。

人間は、いったん踊りはじめると、阿呆になる。野生ねずみのように、崖がそびえていようが大河が横たわっていようが、思考を停止させて、みんなで同じ方向を向いて死の行進を続ける。死の行進といっても死ぬ个体数は、10パーセントにも満たないのだから、確実に死が待っているわけではない。だから「赤信号みんなで渡れば怖くない」の原理でどんどん行進を続けていく。バブル景気がまさにそうであった。

バブル景気では、多くの日本人が踊らされた。高級車に乗り、高い酒を飲み、クリスマスには高級ホテルに泊まり、金を借りてまで株を買った。ケインズの経済論が間違っていないことは見事に証明された。では日本人全員がハッピーだったのであろうか。

確かに踊らされていた人々はそのときハッピーだった。みんなと同じような服を着て、同じような行動をとってれば、クリスマスには一緒に過ごせる彼女や彼氏がいた。バブル景気は、まさに踊る阿呆の天国であった。

では踊らなかった日本人はどうであっただろうか。冒頭の阿波踊りの掛け声のとおり、踊らないで見てだけの人々も阿呆ということになってしまった。頭脳や性格が阿呆なのではなく、好景気に踊らされなかったことが阿呆なのだ。好景気に踊らないで、自分の応分の幸せをみすみす取りのがしているということが阿呆なのだ。

だからバブル景気は、踊らないで見ている人々にとっては多少なりとも苦痛なイベントであった。ではなぜ踊らされる人と踊らされない人に分かれるのであろうか。

哲学者キェルケゴールによると、踊るタイプの間人は絶望しかかっている人間なのだそうだ。人間が理想の自分に変わるためには、新しい自分に変わり続ける必要がある。だが人間は踊っている状態のとき、新しい自分に変わる自由があることを忘れているのだ。踊るほうが楽しいので、理想の自分像というものを忘れてしまうのだ。

一方、踊らされない人というのは、もう絶望しているのだ。どう倫理的に生きるかということの主眼においているのだが、絶望が一段と深まると、自殺したり、破壊行為に走ったりする。

では、バブル景気というのは、いったい善だったのだろうか悪だったのだろうか。バブル景気の後、服飾業界では価格破壊が起こった。人件費の安い海外で縫製したり、裏地などの外からは見えない部分の作業工程を減らしたことによって、価格を劇的に下げたのである。

筆者は、バブル景気の最中に製造されたスーツを調べてみた。お手ごろ価格のスーツだけあって、縫い手の技術はおせじにも高いとは言えなかった。時間がたつとスーツの縫い目が攣れてきた。出荷時にアイロンをしっかりとかけて攣れをごまかしていたのだ。だが、作業工程を抜いたようには思えなかった。裏地を省いたりはしていなかった。要するにバブルは、大勢の非熟練労働者が、真正直に製造を行った時代なのだ。

バブル景気は再来するであろうか。バブルの最大の要因は、株価の大暴騰にあった。日本の株式市場の総生産量は、あまりに巨大すぎるため、国民総生産（GDP）に算入されていない。株式市場の総生産量を算入してしまうと、第一次産業や第二次産業の総生産をも凌駕してしまうので、労働者の士気にかかわるのでさすがにまずいのだ。

なぜ日本の株価は一万円前後で低迷しているのでしょうか。バブル景気のころは、空売りをするためには一千万円以上の資本が必要であった。だから空売りをする人は少なかった。だが今は規制緩和のおかげで資本がなくても誰でも空売りをできるようになった。だから空売りをする人は大勢増えた。いったん株価が上昇基調に乗ったようにみえても、すぐに空売り軍団がそれを相殺してしまうという現象が起こっているようだ。これでは平均株価が上るわけではない。

かくして日本人は踊らなくなった。